ケララでは毎日どこかの村で寺院祭祀（さいし）舞踊ティーヤムが行われている。お面のような化粧で踊る姿に圧倒される

［インド］

ケララの古典舞踊劇

文・写真＝石川 武志

インドの南西に位置するケララ州。美しいビーチや、バックウォーターと呼ばれる水郷地帯、ヤシの林や水田といった自然の恵みと、伝承医学アーユルベーダやカタカリなどの古典舞踊劇で知られる。歴史的にも、世界各地から商人が象牙やスパイス、お茶などの交易を求めてやって来て、独特な文化がはぐくまれた地域だ。

ケララ州の商業都市コーチンから70キロほど南に、バックウォーターの基点となるアレッピーという町がある。運河を中心に発展した町で、ヤシやバナナ、水田の中をクモの巣のように水路が伸びている。ハウスボートと呼ばれる屋形舟でのんびりと過ごす一日はケララならではの極楽だ。地元民が使う水上バスだって楽しい。小さな村々に立ち寄り、家路に着く子どもたちや野菜を抱えた女性が乗り込んできて、現地の暮らしを垣間見ることができる。

コーチンから北東に120キロのトリチュールは、ケララ文化の都といわれ、数多くの寺院祭礼や古典舞踊劇を楽しめる。町の中心にはヒンドゥー教寺院ヴァダックナタン寺院があり、毎年4月ごろに行われるプーラム祭は、何十頭ものゾウの行列が有名だ。これらの寺院にある演舞場では時々、カタカリ、クティヤッタム、ナンギャールクートゥなどが上演される。

カタカリは仮面のような化粧と細かな指の動き、大きく膨らんだスカートのような衣装の舞踊劇。起源はラーマやクリシュナの神話を描いた舞踊劇で、民族的な舞踊や劇、カラリパヤットという武術が影響して洗練され、現在のカタカリが完成した。

クティヤッタムは2000年の歴史を持つといわれる世界最古のサンスクリット劇。俳優は代々チャキャール一族のみによって受け継がれ、上演も寺院内の劇場でしか許されないなど、伝統の重さゆえに消滅の危機に瀕(ひん)していた。ナンギャールクートゥは、広い意味でクティヤッタムに属する演劇の一つ。日本人で唯一のクティヤッタム・アーティスト、入野智江ターラさんが現地で長年活躍している。

トリチュールで見逃せないのがケララ・カラマンダムというインドを代表する芸術学校だ。国内外から来た優秀な生徒が全寮制の施設で、古典舞踊劇、声楽などの厳しい訓練を受けている。

また、トリチュールの南に位置するイリンジャラクーダには、クティヤッタム最後の巨匠と呼ばれるアマヌール・マダバ・チャキャールに師事したゴーパル・ベヌ氏が1979年に開設したナターナ・カイラリ（伝統芸術研究研修センター）があり、クティヤッタムだけでなく希少なケララ文化の復興にも力を入れる。クティヤッタムは2001年にユネスコ（国連教育科学文化機関）の「人類の口承および無形遺産に関する傑作」※に宣言され、日本もその保存と振興を支援している。

※2006年4月に「無形文化遺産の保護に関する条約（無形遺産条約）」が発効したことにより、今年11月に「人類の無形遺産の代表的な一覧表」に記載された。

ケララの象徴的な風景バックウォーター（水郷地帯）。客室やキッチンのあるハウスボートに乗っての旅は格別だ

プーラム祭で、イルミネーションで飾られた寺院とゾウ

舞台の出番を終えた小さな踊り子たち。伝統的な踊りは、子どものときから習い始める

クモの巣のような水郷地帯を水上バスで進むと、買い物帰りの女性や学校帰りの子どもたちが乗り込んできた

フォート・コーチンの伝統漁法の風景。人々の憩いのビーチでもある

激しいドラムの中、トランスになりながら、火が燃えるつぼを腰みのに付けて踊るティーヤムの演者

ナンギャールクートゥを演じる日本人の入野智江ターラさん。ナンギャールは「女」、クートゥは「演技する」を意味し、女優の演じる一人芝居だ

ケララ・カラマンダムの生徒たち。張り詰めた空気の中で、汗を流しながら練習に励む光景は感動的だ

舞台の前に入念に化粧する踊り子。大きな目に色鮮やかな化粧がエキゾチック

出番を待つカタカリの演者。化粧や着付けなど、準備に2時間はかかる